教科（ 外国語 ） 科目（ 英 語 表 現 Ⅰ ） 単 位 数（ 3 ）

類型（ 共通 ・ 文 ・ 理 ） 履修規定（ 必修 ・ 選択 ）

年間目標	教 科 書 ・ 副 教 材 等
英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。具体的な言語活動は次のとおりである。 ア 与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す。 イ 読み手や目的に応じて、簡潔に書く。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。	1 教科書「CROWN English Expression I New Edition」 三省堂 2 その他「総合英語」「英和辞典」「演習問題集」

期	月	学習内容（予定時数）	学習目標（短期目標）	学習のポイント・観点別評価
1学期	4	高校での学習の仕方 （2）	・高校での学習の仕方を理解する。	・予習・復習の進め方を理解できたか。 ・辞書の活用法が理解できたか。
	5	**Lesson 1** （5） フィンランド	・自分の高校を紹介することに積極的に取り組み、コミュニケーションを図る。 ・時制についての理解を深め、コミュニケーションを図ろうとする。	・過去の出来事や現在・未来のことを表現しながら自己紹介できたか。 【知識・理解】
		Lesson 2 （5） 2020年東京オリンピック．	・自分の好きなスポーツ選手について話すことができる。 ・助動詞に関する概念を正しく理解し、その運用力を高める。	・助動詞を用いて対話の中で依頼することができたか。 【表現の能力】
		※問題演習 （10）		○ 連休課題提出 ○ １学期中間考査
	6	**Lesson 3** （5） 広重	・日本の事物について話すことができる。 ・受動態を正しく理解し、その運用力を高める。	・学んだ表現を用いてスピーチの中で報告できたか。 【表現の能力】
	7	**Lesson 4** （5） シロクマを救え！	・環境保護のやり方を紹介する表現を理解している。 ・不定詞の用法を正しく理解している。	・学んだ表現を用いて身の周りの問題点を表現できたか。 【表現の能力】
		※問題演習 （10）		○ １学期末考査
夏休み		夏季休業中課題	・既習内容の定着度の確認	・自己の弱点を明らかにし、その克服に向けて努力したか。
2学期	8	**Lesson 5** （5） 国境なき医師団	・世界遺産について話すことができる。 ・動名詞に関する形と意味を理解し、その運用力を高める。	○ 夏季休業中課題提出 ・学んだ表現を用いて世界遺産について発表することができたか。 【表現の能力】
	9	**Lesson 6** （5） ロゼッタストーン	・日本人に関するステレオタイプを紹介する表現を理解している。 ・分詞の用法を理解している。	・学んだ表現を用いて様々なステレオタイプについて理解することができたか。 【関心・意欲・態度】
	10	※問題演習 （10）		○ ２学期中間考査

	月	学習内容（予定時数）	学習目標（短期目標）	学習のポイント・観点別評価
2学期	11 12	**Lesson 7** （5） すばる望遠鏡 **Lesson 8** （5） 神戸の鉄人 28 号 ※問題演習 （10）	・太陽系の惑星についての表現を正しく身に付ける。 ・比較の様々な用法を正しく理解し、その運用力を高める。 ・日本の建築物を紹介する表現を身に付ける。 ・関係代名詞について正しく理解し、その運用力を高める。	・学んだ表現を用いて様々な惑星についてスピーチを通して説明することができたか。【表現の能力】 ・日本や世界の建築物に関する情報を調べ、発表することができたか。【表現の能力】 ○ ２学期末考査
3学期	1 2 3	**Lesson 9** （5） 中央リニア新幹線 **Lesson 10** （5） 沈黙の春 ※問題演習 （13）	・社会で重要な役割を果たしている科学技術を紹介する表現を身に付ける。 ・仮定法を正しく理解し場面に応じて適切に用いることができる力を養う。 ・2 つの対比的な事物の優劣を論じる表現を身に付ける。 ・接続詞を使って文をつなぐ。	○ 冬季休業中課題提出 ・学んだ表現を用いて科学技術について考察し、事実の説明とそれに関する自分の主張を発表することができたか。【関心・意欲・態度】 ・学んだ表現を用いて自分の人生や生き方に関して発表することができたか。【関心・意欲・態度】 ○ 学年末考査
評価の方法		１・２学期の評価は、中間考査と期末考査の得点に平常の学習活動の評価（課題・授業態度・小テスト等）を加味して、100 点満点で算出する。学年末の成績は、１・２・３学期の成績を基にして、１年間の総合成績として 100 点法で算出する。		

○　英語表現Ｉの学習法

１　予習について

⑴　次の授業で進む範囲の会話や文章に目を通し文意を理解しておく。必要に応じて辞書を引き単語等の意味を明確にしておく。文意のとりにくい箇所については下線を引くなどして「分からない点」を明確にしておく。

⑵　予習の範囲の会話や文章を音読する。このときに場面を理解しながら音読することが大切である。文字と音声と意味の結び付きを強め、滑らかに言えるまで暗記する。

⑶　Grammar、Exercises と Express Yourself について

ア　次の授業で進む範囲の教科書の Grammar と「総合英語」を読み、ポイントは何なのかを把握する。予習で理解できないところを明確にしておく。

イ　教科書の例文を、それが表す意味をリアルにイメージしながら何度も音読し、滑らかに言えるまで暗記する。この取組が以降の Speaking や、３年次の「和文英訳演習」や「自由英作文」を含めた Writing の土台になる。

ウ　書き込みスペースをたっぷり取って、Exercises の練習問題をノートに解答する。

エ　英作文問題については、自分の解答を持って授業に臨まなければ、作文能力の向上は期待できないことを肝に銘じるべきである。

⑷　先生の指示に応じて、Group Work で行う活動のための発表原稿を作る。その際、Tool Box の「発表に必要な表現」等をできるだけ活用することを心掛ける。実際、自分の発表したい内容を英語で表現できなければその表現は身に付いたとは言えない。

表現活動に真摯に取り組み、study した内容を learn してもらいたい。

2　授業について

⑴　予習時に疑問を持った箇所を一つ一つ明らかにするべく、集中して説明を聞きながら活動に参加しよう。先生が話す英語や CD に集中して耳を傾けることは、自分の発音の矯正にもなる。単なる答え合わせと考えて油断してはいけない（授業中に油断する時間などない）。授業に貪欲に取り組み、発音やイントネーション、リズムについても学習しよう。授業を受けても疑問が残る場合は、授業後すぐに先生に質問する。

⑵　Grammar と Exercises については、「なぜ」という問いを常に持ちながら授業に臨むことが肝心である。予習段階で理解しにくかった文法項目を理解したり使ったりするために授業は存在する。授業だけで理解できなかった場合は、授業後に必ず先生に質問しよう。

⑶　表現活動では、積極的に英語でコミュニケーションを図ることが大切である。英語はほとんどの生徒にとって外国語であるから、言語習得の過程においてミスや誤りは当然起こる。しかし、このミスや誤りはあなたの英語力の向上には不可欠なものである。これらのミスや誤りを恐れるあまりコミュニケーションをとることに対して消極的になってしまうと、あなたの英語力の発達は遅々として進まなくなり得る。ミスや誤りを恐れずにあなたの意見を英語で発信しよう。

　また、友達の発表を真剣に聞く態度も重要なことの一つである。友人が用いる表現はあなたの表現をきっと豊かなものにしてくれるだろう。

⑷　高校の英語の授業に辞書は必需品。いずれの授業でも常に手元に置いておこう。

3　復習について

⑴　各レッスン冒頭の会話や文章を暗記できるまで音読しよう。

⑵　Grammar と Exercises については、ワークブックを活用してドリル演習を行い、その日のうちに文法事項の定着を図ろう。

⑶　表現活動で用いた表現を暗記するまで音読しよう。

4　その他

　英語には、読む、聞く、書く、話すという４技能がある。英語表現ではその中でも、英語を話したり書いたりすることを重視する。発表の内容は多岐にわたる。例えば、与えられた話題について即興で話したり、読み手や目的に応じて簡潔に書いたり、情報をまとめ、発表したりする。言語習得の過程を考慮すると、英語に関する十分な知識の蓄積がなければ英語を発信することは困難である。１年生で履修するコミュニケーション英語Ⅰとの関連を図りながら学習を進めることは言うまでもないが、それだけではなく、日頃からできるだけ多くの英語に接することが大切である。また、正確に情報を読み取り自分の考えを発表するためには文法知識が不可欠である。１年生で学習する文法項目は中学校までとは比較にならないほど膨大である。しかし、一つ一つの文法項目を深く理解することでそれぞれの文法項目を関連付けて理解することができ、覚えるべき量を減らすことができる。この点で、文法の丸暗記は厳禁である。

　インターネットを介せば世界中の情報が誰の手にも平等に届く世の中に皆さんは生きている。英語で書かれた読み物をリアルタイムで入手できるだけでなく、そうした文がネイティブスピーカーによって読まれる音声を聞くことも可能である。これらを活用しない手はないだろう。結局、「英語力＝英語量」なのである。